絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践
～絵本『ペンギン兄弟れっしゃのたび』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

高山可楓・初田有紀奈
池田光来・松田愛来
服部実結・國武千聖
鐘ヶ江あやの･田中夏陽

題材とした絵本：『ペンギン兄弟れっしゃのたび』　文：工藤ノリコ　絵：工藤ノリコ　出版：ブロンズ新社（第26刷）

タイトル：「どうぶつれっしゃのたび」

実践準備の担当：プロデューサー（田中夏陽、池田光来）、衣装（服部実結、鐘ヶ江あやの）、小道具（國武千聖、初田有紀奈）、音楽（高山可楓）、記録・報告書（松田愛来）

実践時の担当：ウサギ（服部実結）、クマ（國武千聖）、カエル（池田光来）、ネコ（田中夏陽）、パンダ（初田有紀奈）、ナレーション（鐘ヶ江あやの）、音・演奏（高山可楓）、カメラ・音響（高山可楓、松田愛来)

1. 題材「ペンギン兄弟れっしゃのたび」選定の理由

この絵本は、ペンギンの兄弟だけで初めて列車に乗っておばあちゃん家にお出かけする内容になっていて、お出かけするまでの持って行く物やお弁当の準備をするところがあり、自分も一緒に列車に乗って遠足に行っているような気分になれるところが特徴だと思う。

対象に適した物であると考えた理由は、この絵本を読んでどのような遊びが展開されるかなと考えた時に猛獣狩りやじゃんけん列車、列車ごっこという意見がありその中でもじゃんけん列車は4歳児になるとじゃんけんの仕方やルールを守って楽しく遊べるのではないかと思ったから。また、体を動かしながら友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じることができるなと思ったためこの絵本を選んだ。

他には、旅に出かける前の準備の段階でお弁当を作ったり持ち物を一緒に確認したり子ども達と対話しながら進めることができるのではないかと考えたから。絵本の最後には海が見えてくるので、子どもたちも画面上だけど海を表現することでただじゃんけん列車をして旅に行くだけではなく本当に旅に行ったような気持ちになれるのではないかと思ったから。

（執筆者：初田有紀奈）

2.絵本の世界から遊びへの展開

「ペンギン兄弟れっしゃのたび」の絵本は列車にまつわる絵本なので、子どもたちが列を長く作ってつながる遊びであるじゃんけん列車を行った。また、じゃんけん列車を行う際はピアノを弾いて音楽を流し、楽しい雰囲気を作り子どもの気分を盛り上げるような工夫を行った。

次に、絵本に列車が出てくるということで乗り物にちなんだ乗り物のシルエットクイズを行った。オンラインであったけど子どもたちは画面に写し出される乗り物の影だけを見て「これは何だろう…？」と考えている姿が多く見られた。また、答えが分かった子どもたちは声をあげて次から次に乗り物を答えている姿がとても印象的だった。

シルエットクイズを通して子どもたちの想像力やものの特徴を捉える力を育むことができたのではないかと感じた。シルエットクイズでは特徴の無いものは答えにくいため、できるだけ子どもたちが分かりやすくて日常生活の中で見たことがあるような乗り物を選ぶようにした。また、簡単な乗り物のクイズは最初の方に、難しい乗り物のクイズは最後の方に行うなど区別をつけた。

（執筆者：池田光来）

3.実践に際して大切にしたこと

子どもたちとのやり取りで、直接ではなくオンラインでもこれだけ楽しむことが出来る、ということを体験して欲しいと考えた。子どもの声に耳を傾け、それを出来るだけ拾って対話をすることで、子ども自身から「 ちゃんと自分の声が届いているんだ」と興味や関心を引き出し共に楽しむことができたと思う。絵本「ペンギン兄弟れっしゃのたび」を元に脚本を立て、絵本を知っている子も知らない子も同じぐらい楽しめるように準備を進めた。

また、自分たちの劇の披露で終わらないように、子どもが楽しめることを一番に考え、馴染み深い乗り物クイズをしたりして、活動に繋げた。「列車」を大きなキーワードとし 遊びを展開すると決めて、遊びながらも、脚本の芯がぶれないように心がけた。

子どもとのお弁当の具材などのやり取りでは、1つのパターンだけでなく、複数のパターンを用意しておくことで、子どもの様々な考えや発想を取り入れることを大切にした。実際に行うと、自分たちが思っていた以上の驚くような返答が続出し、どうしようと思ったこともあったが、そのような時にどう返すかも、臨機応変に対応することを心がけた。

(執筆者：田中夏陽)

4.内容について

（1）　全体の構成

①画面越しの子どもたちに向けて子どもたちが理解できるような言葉を選び挨拶をする。
②クイズ形式にして子ども劇場で出てくる動物たちの紹介を行う。
③活動の導入として、絵本にちなんで乗り物のシルエットクイズを行う。
④子どもたちに「一緒にじゃんけん列車をしよう」と声をかけ、オンラインでも子どもたちと一緒になって楽しめる遊びを提示する。
⑤ピアノの伴奏に合わせてじゃんけん列車を楽しむ。
⑥列車に乗ってお出かけするために持っていくお弁当を、子どもたちと一緒に画面越しでパネルシアターを使いお弁当の歌を歌いながらお弁当の具材を準備する。

⑦お出かけに出かける動物が一人ずつ「自分が人間だったら」食べたいご飯をお弁当にして子どもたちに紹介する。
⑧動物全員が準備したお弁当を持ち「どうぶつれっしゃ」に乗り、みんなでピアノの伴奏に合わせて「線路はつづくよ」の歌を歌ったり、海を見たりして列車の旅を楽しむ様子を表現する。
このように絵本のストーリーを自分たちなりにアレンジして子どもたちとの対話的活動を楽しみ、最後に「今日は楽しかったね一緒に遊んでくれてありがとう」などと子どもたちに声をかけ活動を振り返り活動を終える。

（執筆者：池田光来）

（2）　子どもたちとの対話について

子どもたちとの対話について、いちばん大切にしたことは「誰もが応えられる質問」「子どもたちによって様々な答えが出る質問」にすることを意識して対話を取り入れた。正解がある質問だけではなく、その時によって返答が違うような質問も取り入れることで子どもたちの興味を引き出すことを意識した。また、こちらが意図していない返答についても「そういうのもあるね」「お、いいね」と肯定的な声掛け、対話をおこなった。子どもたちの楽しもうとする力に助けられながら楽しい対話ができたと思う。

また質問するだけでなく一緒に歌ったり、クイズをする中で子どもたちとの一体感を感じながら活動することが出来た思う。反省点としては声の大きさで子どもたちに届いてないことがあったり、遊びを展開する側だけで進めてしまうところがあった。もっと深く子どもたちとの対話を想像する力が必要になると改めて感じた。対話では、子どもたちにわかりやすい言葉や声のトーンをもっと意識して対話を行うともっと良かったかなと思った。

また子どもたちの選んだお弁当の具を実際に持っていくことで選ぶ楽しさや画面越しだけど物語の繋がりを感じてもらうことが出来たと思う。どうぶつが電車に乗るという現実的では無いストーリーだが、そこも現実と繋がりのあるように「いつもは○○食べてるけど人間だったら○○が食べたいな」など現実と結び付けられるような物語や対話にできたことがとても良かったと思う。

（執筆者：服部実結）

（3）表現の工夫

道具の工夫としては、子どもたちが答えそうなお弁当のおかずをなるべく多く作り、「自分が答えたおかずが出てきた！」という喜びを感じてもらうこと。プレの際カメラの切り替えが遅く子どもたちが退屈している様子が見られたので、本番では子どもたちが退屈しないよう、カメラの切り替えをスムーズに行った。スムーズにできるよう事前に、カメラを切り替えるタイミングをグループ内で確認し、カメラを切り替える間をあまり作らないようにした。スムーズに行うことが難しい場合は、声掛けで繋げたりその声掛けも子どもたちがワクワクするような声掛けをおこない、子どもたちが退屈しないようにした。
1番力を入れた撮影方法は、電車が本当に動いている様子を表現するために先生にアドバイスをもらいながら、カメラを少しづつ動かす工夫を行った。最後の方には、カメラを逆に動かして、去っていく様子をあらわすことが出来た。

（執筆者：高山可楓）

（4）音と音楽

ジャンケン列車の伴奏では、子どもたちの様子を見ながら速度を遅くして弾いた。線路は続くよではプレの際音があまりはっきり聞こえてなかっ

たので本番では、一つ一つの音をはっきりと引くことを意識した。途中子どもたち達との回線が途切れてしまい、曲も止まってしまったが気持ちを切り替えて演奏をすることが出来たと思う。回線が途切れても、それも物語の1部として子ども達も不思議に感じた様子がみられてハプニングとしてではなく、ひとつの出来事として子ども達が受け止めてくれていたので良かったと思う。撮影場所でははっきりと音が聴こえているが、子どもたちの所では、音が聴こえづらい様子が見られることがあったので、子ども達の様子をしっかりと観察しながら演奏することを心がけた。

反省点として、音を使った演出が少なかったかなと思った。子どもたちのワクワク感を増すためにはもう少し音を使った演出を増やすべきだったかなと思う。最後の海の音を表す際、音を使った演出を行ったが、動画を振り返ると音があまり入っていなかったのでもう少しマイクに近づけて音を鳴らす等の工夫を行えば良かった。

（執筆者：高山可楓）

（5） プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

プレでの子どもたちの反応や様子はとても良く、私たちの声かけに答えてくれたり、動いてくれた。次々に出てくる動物たちにとても笑顔で反応し、なんの動物か答えてくれた。

シルエットクイズでは、「これ知ってる」「絶対あれだよ」と子ども同士で話していたり、じゃんけん列車では、ピアノと動物たちの動きに合わせて楽しんでいる姿が見られてよかった。

列車に乗り込み歌を歌う場面では、作成した列車に対して子どもたちが「すごい、かわいい」と列車に興味を示してくれた。歌も一緒に歌ってくれる子が多くて、一緒に列車に乗っているようでとても嬉しかった。

反省としては最初の挨拶でもっと子どもたちに問いかけたり話を広げることができていれば「次は何があるのかな」と気持ちを高めることができたのではないかと思った。

お弁当の歌をパネルシアターで映した時に、「わーすごい」と子どもたちの反応がとてもよくて嬉しかった。しかし、どんな具材があるかという私たちの問いかけに対して、子どもたちがたくさんの具材を答えてくれていたけれど、準備していないものもたくさん出てきて子どもたちの発想力の豊かさを感じたと同時に、準備不足であると思った。子どもたちの発想力をしっかりと考え、準備に望むことが大事だと思った。

また、動きと動きの間に声かけが入ることで子どもたちもワクワクした気持ちで待つことができると思ったし、一つ一つの動きに対してもっと大きな動作で表現したら良かったと感じた。

（執筆者:鐘ヶ江あやの）

（6）取り組む過程での改善と工夫

お弁当をお弁当の歌に合わせて作るところをパネルシアターからカメラでするように変更した。子どもたちが好きそうなお弁当の具材をたくさん用意した。

持ち物確認をする場面ではカメラで１つひとつを映し、子どもたちに持っていくのか、持っていかなくていいのかを問いかけるところを動物たちが持ち物を持ってカメラの前にいき、子どもたちに問いかけるように変更した。持ち物は絶対にいるものと絶対にいらないようなものを用意し、わかりやすいように工夫した。間が開かないようになるべくアップにしてカメラを切り替えて子どもたちが飽きないような工夫をした。

電車はあらかじめカメラに合わせて出しておき、スムーズに進行するようにした。電車が走っているように見せるためカメラを動かし、また、窓を広げて全員が見えるようにした。海を見せる場面では、これはなんだと思う？というクイズ形式に変更した。海の生き物を作る際に同じ生息地にいる生き物に統一し、蟹やイカの足も本物と一緒の本数にし、細かいところにもこだわった。話すときには動物の顔を見て動作などを大きくしポーズを決めたりして子どもたちが見てもわかりやすいように、工夫した。

最後はみんなも電車にのってお出かけしてみてねという声かけだったが、動物たちが次に行きたい場所を言って電車の旅を楽しんでねという声かけに変更した。

（執筆者：松田愛来）

（7）幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

本番での子どもたちの反応はとても良く、私たちが問いかけた時にはしっかりと答えてくれた。みんな元気が良く、積極的にたくさん発言してくれた。乗り物クイズでは、正解した時にみんなで喜んでいる姿が見られた。劇に出てくる動物や乗り物を英語で言っている子がいて凄いと思った。じゃんけん列車は、動物たちの方を見ながら一緒に楽しんでいる様子だった。私たちはじゃんけん列車をしている途中にもっと声掛けをするべきだったと思った。途中トラブルが起こった時には「大丈夫？」と心配している子や、物語に繋げている子も

いて、子どもの発想は凄いなと思った。持ち物紹介の時には、動物が持ってきたものを子どもたちがいるか要らないか答えている姿が見られた。電車の場面から海が出てくるところでは、子どもたちが「電車が海に飲み込まれた」と表現していて、私はなるほどそのような考え方もあるんだと感心した。全体的に子どもたちも楽しんでいる様子だったので良かったと思う。

反省点としては、声が聞き取りづらい部分があったことと、動きが少し小さかったことだと思う。もっと大きな声ではっきりと声掛けをし、1つ1つの動きをもっと大きくしたら良かったと思った。

（執筆者：國武千聖）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【高山可楓】

今回の子ども劇場を通しての最大の学びは、準備段階で子どもたちたちの色々なパターンを予想して、どんなパターンでも対応できるようにしておくことが重要ということだと感じた。準備段階の話し合いの中で、たくさんの意見を出し合い、「こんなパターンもあるね」というのがたくさんでると本番の際臨機応変に対応できるなと感じた。プレの際、考えてもいなかった回答が返ってきたり、子どもたちに好きなお弁当の具材を言ってもらう場面で自分たちが考えていなかった具材がたくさん出てきたりと予想外のことが沢山起こった。それを受けて、プレから本番までの間で、色々な場面が起こることを予想して、お弁当の具材を増やしたり「もしも、このような回答があったら、自分たちはこのようにして対処しよう」と予想外なことも想定して出来たと思う。

本番での実際の子どもたちの反応を見て、子どもたちが一生懸命答える姿や、自分たちと会話を楽しむ姿が見られて、達成感を感じることが出来た。しかし、所々子どもたちが盛り上がっている時に声掛けをしてしまい、何度か言い直すところがあったので、子どもたちの様子をしっかり観察した上で話し出す工夫が出来たら良かったかなと思った。　他のグループよりも、手出しが遅く間に合うか不安な部分があったが先生方にアドバイスを頂いたりグループで話し合いを重ねて本番に間に合うことが出来よかった。

【服部実結】

今回のこども劇場を通じての最大の学びは子どもたちの意欲や楽しみを引き出す力を少しでも得ることが出来たところだと思う。遊びを展開していく中で私たちが思う以上に、子どもたちの楽しもうとする力や感性に気付かされることもあった。少し難しく問いかけてしまった時も分からないなりに「こうなんじゃないかな」と考え自分の気持ちを伝えてくれる場面もあり、子どもたちが、対話を楽しもうとしてくれている場面があった。

準備の過程ではなかなか意見がまとまらなかったり、思うように進まないこともあったが、話し合いや活動を進めていく中で「子どもたちと本当にしたいことはなにか」を見つめ直す機会もあり、徐々に協力しながら進めることが出来たと思う。実際にプレをしてみる中で思っていなかった子どもたちの返答やハプニングがあったため、構成自体を見直し子どもたちの楽しめる空間を意識しながら練習や準備を行って、本番に望むことが出来たと思う。

本番では今までの練習の中で1番子どもたちとの対話も進み、楽しめる空間を作ることが出来たと思う。またトラブルもあったが、そこも乗り切り、最後までやりきることが出来たと思う。反省としては計画通りにいかずに細部にまでこだわることが難しくなってしまったことだと思った。もう少し期日を意識した行動をするべきだったと思った。こども劇場を通して改めて、私たちが思う以上に子供たちの自分から楽しもうとする意欲や自分なりに参加しようとする力を実際に体験する中で学ぶことができた。

【初田有紀奈】

今回の子ども劇場を通しての最大の学びは、子どもたちとオンラインでも楽しめるにはどういう声掛けが必要なのか考え工夫したところだと思う。準備の過程では、まずどういう遊びだったら子どもたちも一緒に参加出来るのか話し合ったり、先生にアドバイスを頂きながら子どもたちに、じゃんけん列車に興味を持ってもらうにはどういう流れが必要なのかを考えたりしながら進めることが出来たと思う。小道具を作る際にはプレまでに間に合うか心配なこともあったけどみんなで役割分担しながら小道具を作ったりどういう展開にしたら子どもたちとやりとり出来るのか話し合いながら進めることが出来た。

実践の際の子どもの反応では、動物を答える場面や乗り物クイズ等で元気よく答えていて、子どもたちとの対話を楽しむことが出来たと思う。また、途中でハプニングがあった時にも子どもたちが「死んじゃったの？」等と面白い発想をしていてすごいなと感じた。　私はプレで、持ち物を子どもたちに聞く時に自分ではきちんと意見を聞いていたつもりでも上手く聞き取れてなかった部分もあったので、本番では子どもたちがなんて答えているのか聞き取れるように意識して取り組めたので良かったと思う。

【田中夏陽】

今回の子ども劇場を通しての最大の学びは、子どもと直接ではなく、オンラインで繋がって対話する際に どれだけ一緒に楽しむことが出来るかを工夫した所だと思う。直接か

かわると、その時の子どもの細かい表情や声を1人ずつ拾うことが出来るが、オンラインだと応答に 時差があったり、場面によっては聞こえておらず、再度言い直すことも多々あった。そのような状況の中で、どうしたら子どもと一緒に楽しむことが出来るか、準備の段階からグループで考えてきた。

また、実際に子どもたちとやり取りをしたり、他のグループの発表をみると、一緒に身体を動かしたり、クイズをしたりと、ただ見るだけではなく、子どもたちも一緒に参加できる形をとると、より意欲的にかかわってくれていることに気づいた。ジャンケン列車や乗り物クイズを取り入れることで、子どもたちが真剣に答えてくれたり 一緒になって楽しんでくれていることが嬉しかった。ダンボールで作った列車の窓から顔を出してみたり、カメラワークで列車が動いているように見せる方法を使った。力を入れた部分でもあったので、子どもたちの「電車が動いてる！」との声を聞くことができて良かった。

私たちのグループは機材のトラブルで一時中断する事態も起きたが、現場の先生たちや子どもたちの豊かな発想のおかげでトラブルさえも楽しむことができたと思う。

課題点としては、もう少し準備期間を考えて行動したら良かったかなと思ったが、楽しく、グループで協力して無事に終えることが出来た。

【池田光来】

今回の子ども劇場を通しての最大の学びは、子どもたちがどのような工夫をしたら一緒になって絵本の世界を楽しんでくれるのかを考えることができたところだと思う。画面越しの子どもたちに何を伝え、楽しんで欲しいのかを明確に決めて進めて行くことが重要であると感じた。準備の過程では、上手く準備計画を立てていなかったためプレのギリギリになって足りない物に気づいたりした。そんな状況の中で行ったプレでは、私達が子どもが反応するだろうなと思っていた場面で子どもの反応がなかったり、また逆に予想していなかった所で反応があったりしたため困惑するところもあった。しかし、プレでの反省点や改善点をみんなで出し合ったことで本番では子どもたちと一緒に絵本の世界を楽しむことができた。

実践の際の子どもたちの反応では、本番終了後子どもたちが子ども劇場の感想を話してくれたり、子ども劇場の内容について活動の中で出てきた言葉を楽しそうに真似している子どもがいた。また子ども劇場最中に、子どもたちが私たちが演じていた動物たちのセリフやペープサート、絵に反応していたり、一人ひとりが笑顔で楽しんでくれていたため、自分自身も楽しく子ども劇場を行うことができた。

【國武千聖】

今回のこども劇場を通しての最大の学びは、オンラインでも工夫をしたら子どもたちと一緒に楽しむことができるということだと思う。最初は、オンラインで子どもたちと楽しむのは難しいのではないかと思っていたし、上手くできるのかも不安だった。しかしみんなでどのようにしたら子どもたちが楽しんでくれるのかを1から考え、徐々に進めていくことが出来た。準備の過程では、なかなか上手く進まなかったり苦戦した部分もあった。プレの際は想定外の子どもの発言もありなかなか上手くいかなかったが、アドバイスを受け改善を重ねることにより、より良い劇を作り上げることが出来たので良かったと思う。また、持ち物紹介の時私は、新聞紙を要らないものとして紹介したつもりだったが、子どもたちは「新聞紙はレジャーシートの代わりにしたらいいんじゃない？」と言っていてなるほどと思ったし、子どもの発想は本当にすごいと思った。子どもの発想は大切にしようと思った。

本番では予想していた以上に子どもたちの反応が返ってきたので、すごく進めやすかった。劇が終わったあとに「また見たい」と言ってくれた子がいたので、やって良かったなと思えた。子どもたちの素直な反応を見ることができ、とても学びになった。オンラインだからこそできるカメラワークなどもあり、すごく良かったと思った。

【松田愛来】
　今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、子どもたちの反応を予想しオンラインで楽しんでくれるか考え工夫したところだと思う。準備をするときにこういう反応がありそうだねということをグループで出し合い本番に挑むことができた。しかし、予想していた反応ではなく予想してない反応が返ってきたりして戸惑う部分もあったが臨機応変に対応できたと思う。最初はオンラインでできるのかという不安がありましたが、画面越しの子どもたちとどのようにしたら楽しめるのかを考え少しづつですが進めていくことができた。小道具など作るものがプレのギリギリにできたり、足りないものに気づいたり間に合うか不安だったけど役割分担をして間に合わせることができた。準備する時間を考え、早めに話し合い準備するべきだったなと感じた。プレや本番の反省点をいかし、こうした方がいいんじゃない？や、お弁当の具材を増やしたりしてグループで意見を出しあい本番は、より良いものになったのではないかと感じた。
　本番を通し子どもたちの発想はすごいなと感じ、大切にしていこうとおもった。子どもたちが動物たちの声掛けや、じゃんけん列車、クイズなどを楽しそうにしてくれて、劇場をしてよかったなと思ったし、楽しく無事に終えることができた。

【鐘ヶ江 あやの】
　今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは、離れている子どもたちとどれだけ一緒に楽しむことができるのかを工夫したところだと思う。
　オンラインでは子どもの様子を直接見ることができないため、問いかけに時差があったり、子どもたちと会話が被ってしまい何回も言い直しをする場面があった。そのような場合は1度画面越しの子どもたちの様子や会話の内容を聞いたりなど一つ一つのことに対して細かい対応をしていくことが大切であると感じた。
　準備の過程では、小道具等の準備に計画を立てて動けていなかったため、慌ててしまうこともあったが、みんなで意見を出し合い、どうしたら子どもたちが喜んでくれるのか。楽しんでくれるのか。をグループ全員でしっかり考えながら進めていたからこそ乗り越えられたのだと思う。また、プレでの反省や「次はこうしたら上手くいく」と細かなところまで修正を行うことができた。実践の際の子どもたちの反応では、私たちの問いかけ、会話に一生懸命に答えてくれる姿や、笑顔で一緒に体を動かしている姿を見ることができて嬉しかった。

　発表の途中で機材トラブルが起きてしまったが、「動物さんたちどうしちゃったのかな」等、子どもたちの豊かな発想力も見ることができたし、一緒に楽しむことができたなと感じ嬉しかった。